

どぼく 散歩 5

～虎ノ門～



日々生まれ変わり続ける東京。この大都会で土木の香気を探る「どぼく散歩」の第5回は港区虎ノ門エリア。5年前に虎ノ門ヒルズが開業し、現在、来年の東京五輪に向けて再開発が加速する虎ノ門。高層ビルが林立する汐留地区や、銀座、赤坂といった繁華な街区に包囲され、どこか官庁街、ビジネス街の印象があったこのエリアも近年大きく変貌を遂げようとしています。

虎ノ門のトラから、 江戸、明治期の再整備事業の舞台へ

そもそも何故「虎ノ門」なのか。その地名の由来は諸説ありますが、江戸城外堀に設けられた数ある門の一つ「虎之御門」という柵形の門がこの付近にあったという説が有力です。江戸時代には陰陽学に基づき、東に青龍、南に朱雀、北に玄武、そして西に白虎という四神が町を守護するとされていました。江戸城の西方面に位置する門が「虎ノ門」。現在の文部科学省脇にその門跡が残されています。

東京メトロ銀座線で虎ノ門駅にやってきました。地上に出るとそこは桜田通りと外堀通りが交わる虎ノ門交差点。8番出口のすぐ後ろに、虎のブロンズ像が鎮座しています。さほど大きくはないので遠目に見ると

猫が御影石の上で一休みしている風情。かわいらしく見えますが、その表情はなかなか精悍です。

交差点を渡り、外堀通りに沿って西に進むと左手の虎ノ門琴平タワーの下に金刀比羅宮があります。ビルの陰にひんやりとした神聖な空気が漂う都会のオアシス。立派な明神型銅鳥居には左右の柱に四神の彫像が飾られています。

外堀通りをさらに西へ向かうと赤坂一丁目の信号。右手の特許庁から左手のJTビル、虎の門病院へ抜ける環二通りの一帯は江戸時代、葵坂と呼ばれる坂がありました。坂の長さは24間(約40m)、幅は6間4尺(約12m)。坂の北側には溜池からどうどうと音を立てて流れ落ちる洗堰があり、この滝は「どんどん」と呼ばれていました。今はその形跡が全く見当たらない溜池エリアですが、これは江戸期に江戸城を防御する外堀



上／歌川広重『廣重東都坂巻』より、江戸期の「葵坂之図」。左手に坂、右手には溜池が描かれている。(資料：国立国会図書館)

下／現在の葵坂。虎ノ門方面から西の赤坂方面へ向かうと、緩やかな上り坂になっている。



上／虎ノ門交差点に鎮座する虎のブロンズ像。
すぐ横を大勢の人が脇目も振らず通りすぎるが、たまに足を止め、その表情を覗き込む人の姿も。

右／虎ノ門ヒルズタワーと、その下を貫く虎ノ門トンネル。右手の建物は、東京メトロ日比谷線に新しくできる「虎ノ門ヒルズ駅」の工事用仮囲い。新駅は2020年の東京オリンピック開催前に一部供用開始予定。最終完成は2023年3月を予定している。



の強化、飲用水の確保を目的として築かれた人工湖でした。上野の不忍池以上の大きさを誇る溜池、葵坂一帯は名高い江戸名所になっていました。やがて水質も悪化、周囲が埋め立てられ、明治初期には堰堤も撤去されて溜池は姿を消していきます。埋立てには坂上の土砂が資材として活用され、一帯は町屋として再生したといわれています。安藤広重の浮世絵に描かれた葵坂の急峻さに比して、令和のこの時代周辺を見回しても、「ここが坂か？」と首をひねる平坦さ。その背景には江戸期から明治にかけて、その時代ごとの土木技術を駆使して住みやすい町をつくる再整備事業がありました。

東京五輪をバックアップする大動脈 環二通り＝新虎通りへ

外堀通りから赤坂一丁目の信号を大きく左折、環二通りを南下します。その先が虎ノ門ヒルズ。手前の虎ノ門二丁目交差点一帯は都市開発事業が輻輳する一大再開発エリアとして施工が活況を呈しています。

都市再生特別地区（虎ノ門一・二丁目地区）都市計



都電虎ノ門線。桜田門から神谷町駅を結び、現在の東京メトロ銀座線の丁度真上を通過していたことになる。1968(昭和43)年に廃止。



虎ノ門トンネルの新橋側の出入口。トンネルの上には新虎通りが走り、その奥には虎ノ門ヒルズタワーが見える。

画では、地下鉄日比谷線新駅を中心とした交通結節空間の整備、国際競争力の向上を見据えたビジネス発信拠点の構築、環境保全、防災機能の強化を目的とした公園や緑地、街区の整備が進められています。

写真の仮囲いは解体工事の現場。かつてこの一帯には都電虎ノ門線が走っていました。時を経てこの地には、地上49階、高さ264mの「(仮称) 虎ノ門ヒルズステーションタワー」がそびえ、地下の新駅や周辺のビルと連結される計画です。今後5年足らずで高層ビル、地下鉄新駅、街区がシームレスにアクセス可能となる新しい虎ノ門が生まれることでしょう。

その先に屹立する虎ノ門ヒルズは地上52階建てで高



愛宕山を貫く愛宕トンネルは、東京23区内唯一の「山岳トンネル」である。天然の山としては23区内の最高峰となる愛宕山は25.7mの標高があり、頂上に鎮座する愛宕神社境内には、三等三角点も設置されている。



左／愛宕山山頂に境内を持つ愛宕神社の社殿。取材時は「第一期境内整備工事」が行われており、社殿の前が掘り返されていた。
右／「出世の石段」を上から見下ろす。確かにとても急な石段で、手すりにつかまりながら、ゆっくりと降りてゆく人も多かった。

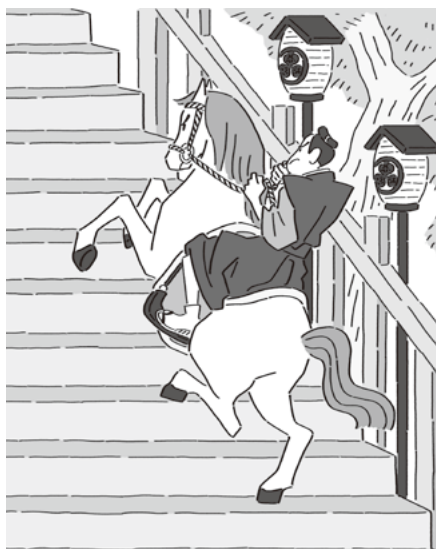


さは247m。都内では東京ミッドタウン（六本木）に次ぐ高層ビルです。特徴は新橋と虎ノ門を結ぶ環状二号线（環二通り）がヒルズの下を走っていること。この道路が計画されたのは戦後間もなくの頃。GHQが竹下横橋と虎ノ門のアメリカ大使館をつなぐ軍用道路の建設を要求したという当時の都市伝説から「マッカーサー道路」と呼ばれていました。その一部、1.4kmが来年の東京オリンピック・パラリンピックでは、ベイエリアの選手村と、新宿・渋谷両区にまたがる新国立競技場などの各競技会場をつなぐ大動脈となります。

虎ノ門ヒルズの下を貫通するトンネル部を迂回してビルの向こう側に回ると、その環二通りは通称「新虎通り」と呼ばれるエリアになります。片側13mを超える真新しい歩道にはカフェやショップが出店しており、今後新たな賑わいを創出する予感があります。

新虎通りの南側にそびえるのが東京23区内自然地形の最高峰、標高25.7mの「愛宕山」です。この山を貫通するのが、これも23区内唯一の山岳トンネル「愛宕隧道」。請け負ったのは飛島組（現・飛島建設）で、1930(昭和5)年に完工しました。

愛宕山の頂上には徳川家康公の命により防火の神様を祀る愛宕神社があり、ここに上る急勾配の階段は「出



左／曲垣平九郎が馬で「出世の石段」を駆け上がる逸話が残されている。

世の石段」として知られています。三代將軍家光公が放った「山上の梅を取って参れ」という難題に、馬を駆って階段を上った、四国丸龜藩の家臣である曲垣平九郎。見事に命に答えその名を全国にとどろかせたと言います。境内を見渡しても残念ながら馬が見当たらなかったのも徒歩で参詣。都の土木業界の安寧と発展をお祈りしました。